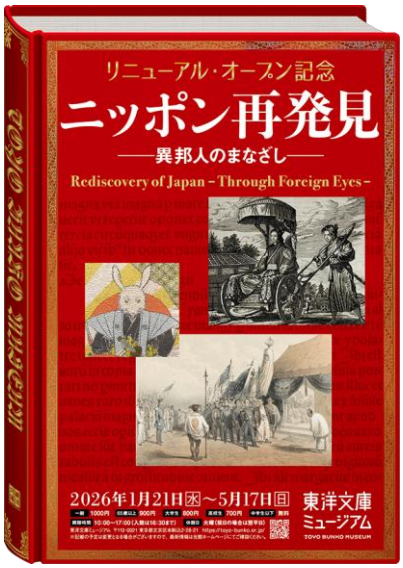
リニューアル・オープン記念

ニッポン再発見―異邦人のまなざし

会期：2026年1月21日（水）～5月17日（日）
会場：東洋文庫ミュージアム
主催：公益財団法人東洋文庫

東洋文庫ミュージアムは約1年の休館を終えて、1月21日より開館いたします。
リニューアル・オープンをかざる本展では、マルコ・ポーロから小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）まで、日本における異文化との接触・交流の足跡、そして外から見た日本イメージの変遷をたどります。
日本を訪れた外国人は、日本にどのような印象をもったのか、海外の文献のなかで日本はどのように記述されてきたのか、歴史的な出来事はどのように認識されていたのか？視点を変えると新鮮な気づきが沢山あるはずです。少し装いを新たにした東洋文庫で再発見しましょう。

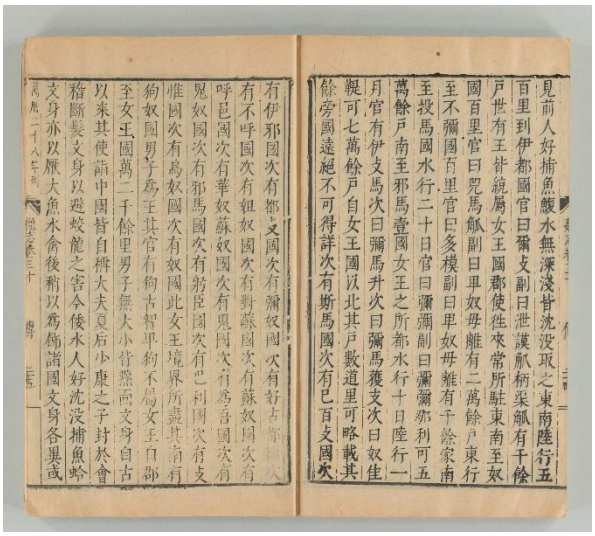


メインビジュアル

展示構成とみどころ

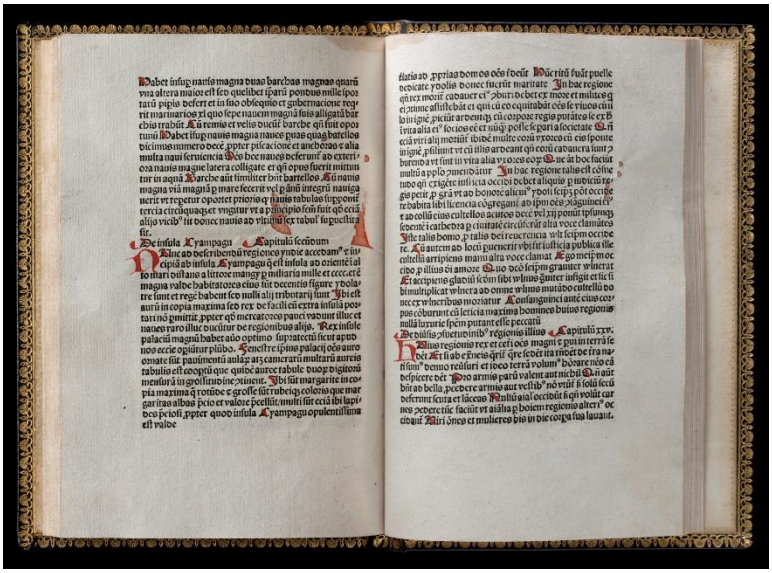
1、書物のなかの「日本」を探す

3世紀頃に成立した「魏志倭人伝」をはじめ、古代・中世の海外において日本を記述した文献は、中国を中心とした近隣の東アジア文化圏のものが多いです。ヨーロッパでは、13世紀にアジアへの旅をして中国に滞在したマルコ・ポーロが、旅行記『東方見聞録』にて日本を「ジパング」と紹介したことが知られています。しかし、マルコ・ポーロは日本を訪れておらず、これらの記述は聞き書きによるものとされています。この章では、日本と諸外国との接触が極めて限られていた時代に、彼らがどのように日本を認識し描写したのか、書物のなかのイメージを探ります。



I.『魏志倭人伝（三国志 魏志）』
3世紀成立、1600年刊

「魏志倭人伝」は、『三国志』のうち、「魏書」に含まれる「烏丸鮮卑東夷伝」という、魏にとっての異民族に関する情報をまとめた部分の、「倭」に関する記述のことです。邪馬台国は「女王の都とするところ」として登場します。邪馬台国の女王だった卑弥呼は、西暦239年に魏へ使者を送り、貢物などを献上しました。

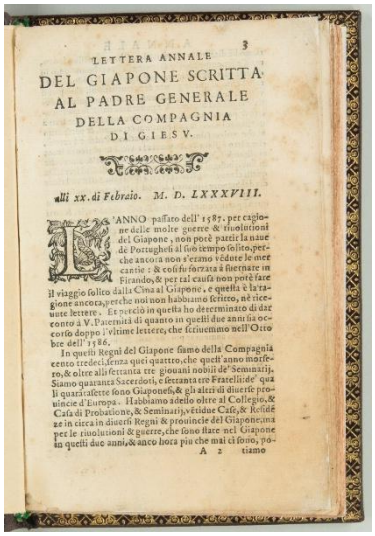


II.『東方見聞録』　1485年刊
マルコ・ポーロ口述、ルスティケッロ著

ヴェネツィアの商人マルコ・ポーロが、父や叔父と東方を旅した際に見聞きしたこと、体験したことがまとめられた旅行記です。東洋文庫には年代がわかるものだけでも、出版年・出版地・言語が異なる『東方見聞録』が約80種類あり、刊本のコレクションとしては世界最大です。本書のなかで、日本は黄金や宝石を豊富に産出する島「ジパング」として紹介されています。その内容は多くの人々の憧れを刺激し、大航海時代の幕開けに大きな影響を与えました。

2、いざ、日本へ - ヨーロッパ世界と日本との対面

15世紀後半のヨーロッパでは、航海術と造船技術の発展を背景に、各国が航路を開拓して海外進出をはかる大航海時代を迎えました。さらに、１６世紀初期にはじまった宗教改革により、カトリック教会再興を目的とした海外宣教が展開されます。以降、世界進出、貿易、キリスト教の宣教は一体となって展開されました。商人、あるいはザビエルをはじめとした宣教師など、16世紀以降にヨーロッパから海を渡り日本を訪れた異邦人は、何に驚き、印象深くとらえたのでしょうか。また、彼らがもたらしたものは日本にどのような影響を与えたのでしょうか。日本での直接的な接触をもとに綴られた記録を中心にご紹介します。



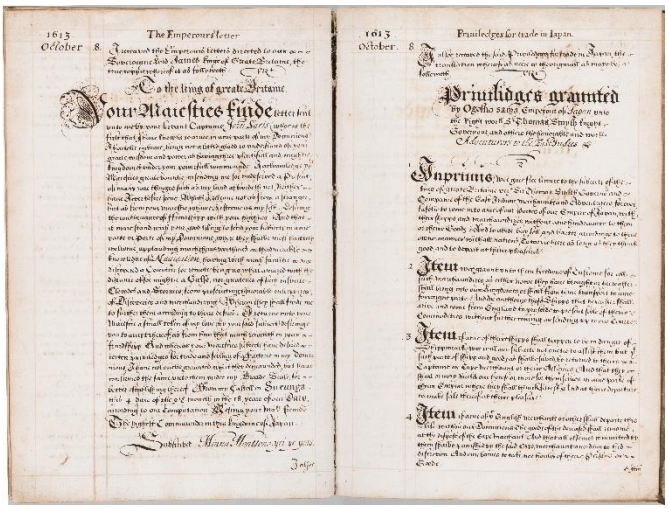
LETTERA ANNALE
DEL GIAPONE SCRITTA
AL PADRE GENERALE
DELLA COMPAGNIA
DI GIESV.

alli xx. di Febraio. M. D. LXXXVIII.

III.『イエズス会日本年報』
ルイス・フロイス　1590年　ローマ刊

イエズス会士フロイスによる1588年2月20日付の日本年報です。1587年当時の宣教師・キリシタンを取りまく状況を概説しつつ、キリシタン大名・大友宗麟の救援要請に端を発した豊臣秀吉の九州平定など、日本国内の政治情勢について詳細に報告しています。また、バテレン追放令が宣教活動に与えた影響を述べる一方、棄教を拒んで領地を没収されたキリシタン大名の高山右近や、密かに洗礼を受けた細川ガラシャなど、迫害に抗う日本人キリシタンの姿も綴られているのが特徴です。

IV.重文『ジョン・セーリスの航海日記』
ジョン・セーリス　1617年清書
1613年、貿易商船隊司令官ジョン・セーリス（1580-1643年）は国王ジェームズ1世（在位1603-25年）の親書を携え、日本で貿易を行う目的で1611年4月18日にイギリスを出帆しました。この資料は当時の航海日誌です。日誌はイギリス出港の日に始まり、セーリスのイギリス帰国の日まで、丹念につけられています。東洋文庫が所蔵しているのは、セーリスがフランシス・ベーコンに献呈したと伝えられる清書本です。



1613 October 8 The Emperour's letter

To the king of great Britame.

1613 October 8 Priuiledges for trade in Iapan.

Priuiledges graunted

V.『日本誌』
モンタヌス　1669年　アムステルダム刊

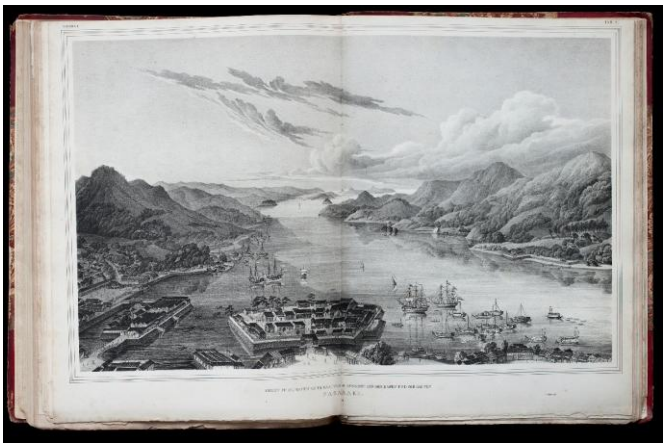
著者のモンタヌスは、アムステルダム生まれの牧師で、作家としても名を馳せました。彼自身は日本を訪れたことは一度もありませんでしたが、イエズス会宣教師の報告書や東インド会社の記録に持ち前の学識と文章力を加えて、想像上の日本を描き出し、ベストセラーとなりました。当時のヨーロッパの人々が抱いた日本に対するイメージを知るうえで貴重な資料といえます。

3、日本を探検・探求する

江戸幕府の創立から間もない1609年に、オランダ東インド会社の商館が平戸に設置され、のちに長崎港内に築かれた出島へ移転しました。商館には医師が駐在し、そのなかには博物学者として優れた人物もいました。彼らは日本滞在中に文献や標本などの資料を集め、帰国後に日本研究の成果を著作に結実させ、歴史、地理、自然、風俗など日本のことを全般的に紹介しました。これらの著作は西洋人の注目を集め、広く読まれました。さらに、18世紀のヨーロッパでは地球規模で探索しようとする動きが活発になり、世界周航のなかで日本沿岸を航海した人々による探検記も増えていきます。ここでは、鎖国下の日本を内側と外側それぞれから探検・探求した視線に着目します。

VI.『世界の鏡』
キャーティプ・チェレビ　1732年

オスマン帝国時代のトルコで初めて作られたアラビア文字の活版印刷本の1つで、世界の地理について記しています。日本（ヤポンヤ島）に関する記述に始まり、地図も掲載されています。
イスラム世界に日本の地理的な情報を詳しく伝えたという意味で重要な一冊です。

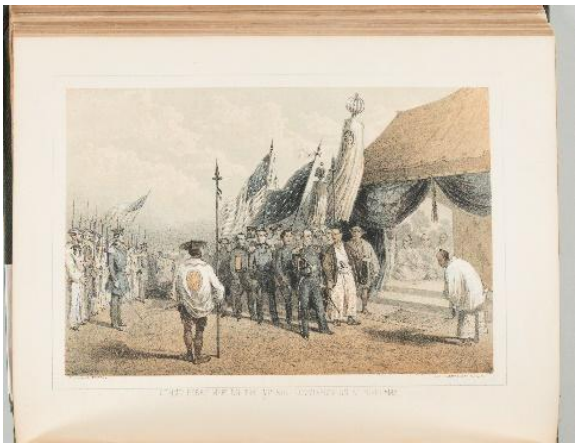


VII.『日本（NIPPON）』
シーボルト　1832-52年刊

ドイツ人医師のシーボルト（1796-1866）は、1823年8月に長崎のオランダ商館付の医師として来日しました。翌年には出島の外に鳴滝塾を開設し、日本各地から集まった医師や学者に西洋医学を中心とした諸科学（蘭学）を教授しています。本書は、日本の歴史・地理・言語・風俗などの諸分野について、自身が調査・収集した資料と既存の資料をもとにまとめた日本研究の集大成というべき書です。

４、異邦人が目撃した幕末

江戸時代をとおして外国との接触を制限してきた日本ですが、18世紀後半以降は外国船の来航による幕府との接触など、ヨーロッパ列強の接近を意識せざるをえない出来事が続きました。一方、19世紀に産業革命を迎えたアメリカは、大量に必要となった鯨油を得るための捕鯨船の寄港地とするなどの目的をもって、日本の開国とアメリカとの通商条約を目指して艦隊を送ります。1853年のペリー来航、翌年の日米和親条約の締結により、日本の鎖国は終わりを迎え、幕末の動乱は激化していきます。1868年の新政府樹立と前後して、日本には諸外国の使節団や大使が訪れています。日本の歴史が大きく動いた出来事を、彼らはどのように記録したのでしょうか。幕末から明治初期にかけて、激動のなかで育まれた異文化交流のエピソードと共に紹介します。



VIII.『ペリー提督日本遠征記』
F.Lホークス　1856年　ワシントン刊

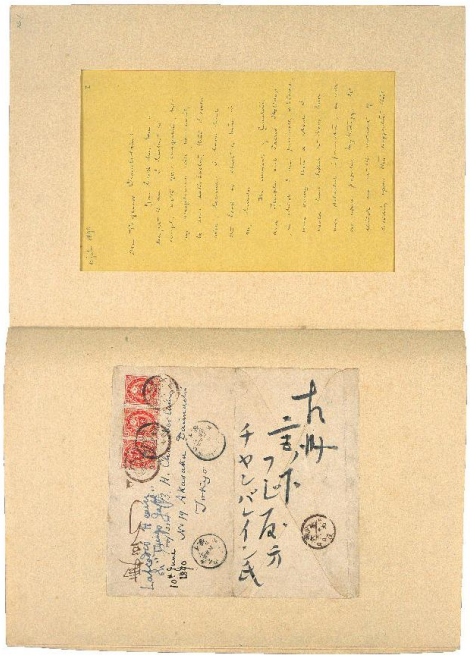
ベリーは 1852 年に東インド艦隊司令官、そして日本との国交開始を交渉する特命大使を命じられました。53年に浦賀に来航し、翌年横浜を再訪して日米和親条約を結びます。本書は、記録の編纂·監修を米国政府から任されたペリーが、関係公文書、自身の日記、乗組員の日記、報告などをもとに、歴史家のホークスに編集させたものです。記された内容は、民族、芸術、自然など多岐にわたります。

IX.『日本・中国・シャムの風景』
プロイセン東アジア調査団　1860-63年

1860年に日本を訪れ、日本とプロイセン（現ドイツ）の修好通商条約を締結したオイレンブルク使節団が作成した報告書の一部です。図版60枚のうち30枚が日本に関するもので、江戸城とその周辺、横浜、長崎などが描かれています。風景だけではなく、日本庭園、寺社、道端の店など、日常の情景も描写しています。また、原画とは別に、それぞれの絵についての詳細な説明も付いています。

5、旅して暮らして記録して－明治日本紀行

開国により日本は国際社会に参入し、近代化への道を歩み始めました。明治時代には、東アジアの人々はもちろんのこと、新たに欧米を中心とした人々が日本を訪れるようになります。外交官、お雇い外国人、宣教師、ジャーナリスト、旅行者など、日本を訪れる目的、滞在期間はさまざまでした。彼らは、日本で生活をする、あるいは各地を旅するなかで体感したことを好意的に、ときには批判的に綴っています。これらの記録をとおして、在りし日の日本をふりかえります。



X.『ラフカディオ・ハーン書簡集』
1890-96年

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、明治時代に活躍したギリシャ出身の新聞記者・日本研究者・小説家です。一方、イギリス出身のチェンバレンは、「君が代」や『古事記』の英訳で知られる当時最も著名な日本研究者で、外国人初の帝国大学名誉教授（東京大学）となった人物です。二人には親交があり、東洋文庫はハーン来日後の1890年以降の複数年にわたって両者が交わした手紙を所蔵しています。

XI.『トバエ』
ジョルジュ・ビゴー　1887-89年

フランス出身の画家・漫画家のビゴーが描いた風刺画です。ビゴーは、当時ヨーロッパで流行していた「日本趣味（ジャポニズム）」の影響を受け、日本美術を研究するため1882年頃に来日しました。1887年に雑誌『トバエ』を刊行し、日本の政治や社会を題材とする風刺画を多数描きました。その作品には、自国の伝統ある文化を忘れて西洋文化を追い求める日本人の姿に落胆し、失われつつある古き良き日本文化を惜しむ気持ちが込められています。

施設とともにロゴもリニューアル！

2024年12月末から、東洋文庫ミュージアムは施設工事のため休館していました。今回のリニューアルのコンセプトは、より多くの方々にとって開かれたユーザーフレンドリーな環境にすることです。開放的になったエントランスにはじまり、来館者にとって見やすく、資料にもやさしい展示ケースなど、リニューアル後の東洋文庫ミュージアムで快適な時間を過ごしていただければ幸いです。
そして、施設リニューアルを機に、東洋文庫と東洋文庫ミュージアムのロゴも装いを新たにしました。新ロゴは森田恭行氏（株式会社キガミッツ）のデザインによるものです。これまでの歴史を引き継ぎつつ、今後より一層みなさまに親しみを感じていただけるように、という想いを込めてデザインしていただきました。

東洋文庫
TOYO BUNKO

東洋文庫ミュージアム
TOYO BUNKO MUSEUM

左：東洋文庫ロゴ
上：東洋文庫ミュージアムロゴ

広報用画像のお申し込みについて

＜画像使用全般に関してのご注意＞
■本展広報目的での使用に限ります（会期終了まで）。使用後はデータの廃棄をお願いいたします。
■企画展名、会期、会場、画像・クレジット（所蔵先）は必ず記載してください。
■転載、再放送など、二次使用される場合は別途申請をお願いいたします。
■Webサイトに掲載する場合は必ずコピーガードを施し、「画像の無断転載を禁じます」旨を表記してください。
■基本情報、画像使用などの確認のため、ゲラ刷り・原稿段階のものを担当者にお送りください。
■掲載・放送後は必ず掲載紙（誌）、同録DVDを担当者までお送りください。

＜広報画像クレジット一覧＞
（１点のみ掲載の場合）公益財団法人東洋文庫蔵
（２点以上掲載する場合）すべて公益財団法人東洋文庫蔵　を必ずご記載ください。

＜広報用画像一覧＞※画像は本文をご覧ください

番号	クレジット
□Ⅰ	『魏志倭人伝（三国志 魏志）』3世紀成立、1600年刊
□Ⅱ	『東方見聞録』マルコ・ポーロ口述、ルスティケッロ著、1485年
□Ⅲ	『イエズス会日本年報』ルイス・フロイス 1590年 ローマ刊
□Ⅳ	重文『ジョン・セーリスの航海日記』ジョン・セーリス 1617年清書
□Ⅴ	『日本誌』モンタヌス 1669年 アムステルダム刊
□Ⅵ	『世界の鏡』 キャーティプ・チェレビ 1732年
□Ⅶ	『日本（NIPPON）』シーボルト 1832-52年刊
□Ⅷ	『ペリー提督日本遠征記』F.Lホークス 1856年 ワシントン刊
□Ⅸ	『日本・中国・シャムの風景』プロイセン東アジア調査団 1860-63年
□Ⅹ	『ラフカディオ・ハーン書簡集』1890-96年
□Ⅺ	『トバエ』ジョルジュ・ビゴー 1887-89年
□	メインビジュアル

上記資料画像を広報素材として提供いたします。
下記のURL、またはQRコードよりお申し込みください。

URL：https://00m.in/VWKtO　　QRコード

（TEL）03-3942-0250　(E-mail)okazaki@toyo-bunko.or.jp　担当者：普及展示部　岡崎